

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*

## ハワイ珍道中 その1

あれはたしか10年あまりまえの秋だった。叔母であるキミちゃんの家に行った時のことである。帰宅途中に母の使いで栗を届けに寄った。ひとり暮らしのキミちゃんは、高齢にもかかわらずシルバー人材センターからの紹介で丹波の黒豆取りをして、帰宅したばかりだった。

私が「えらいなあ、キミちゃんは。76歳の現役フリーターやからな」とほめると「しゃないや、金がないんやから」といつもの笑顔で答えた。

「ヨシよ、またどこかへつれていってくれや」というので、「どこか行きたいところあるか?」と聞くと、キミちゃんは「いっぺんハワイへつれていってくれや」と真顔でつぶやいた。

田舎の婆さん達と温泉旅行はしていたが、ハワイとは……。しかもキミちゃんの口から出たものだから、その突飛さに一瞬驚いた。日々の生活にも窮しているキミちゃんの想いの地がハワイだとは思わなかったのだ。

私は、キミちゃんの顔を見ながら「わしも行ったことないけど、みんなでいこか」と口走ってしまった。「ほんまに、つれていってくれるか」と目を輝かせるキミちゃんに、「ああ、まかしとき」と自信満々にうなずきながらも私は思案した。旅費をどう工面するか。ぼんと自腹をはたいて出せる私ではない。私の旅費さえあやしいのに。

しかし、この機会を逃せば二度と行くことはないだろう。これが最初で最後のチャンスに違いないと思ったのである。そこで、母に妹であるキミちゃんの分を出してくれとせがむ事を思いついた。母も余裕はないが妹のためなら出すはずだ。私の分は、同居している義母にムリを頼むしかない。婆さんたちは初めての海外旅行だが、安い旅費でまかなわなければならない。人が行かない2月が安いにちがいない。農作業もひまだしみんな行きやすいだろうと考えて、キミちゃんに「来年の二月に行くさかい、金のことは何とかするので心配はいらん。ただ、パスポートだけは用意しときや」と言い残して帰った。

いつものメンバーに声をかけたところ、みんな乗り気で行くという。83歳の母、78歳のハルちゃん、76歳のキミちゃん、75歳のトキコさん、75歳の義母である利子さん、と私の6人がそろった。旅行社に行き、安いチケットを探し団体割引をお願いし、婆さんたちはベッドに慣れてないから床に雑魚寝が出来るようにホテルの広い部屋を予約した。

## 女優M(2)

女流詩人Sはわかりにくい。

窪島誠一郎が父水上勉と再会して間もないころ、経営する画廊で詩人の自筆原稿と画家の絵を並べる展覧会を催した。そこにSが、フランス帰りの画家Kと組んで出品したのである。そのパーティの後、SとKを交えて明け方までワインを飲んだという。

その話を水上に話したところ、「Sとなにかあったんやないやろな」と突然顔色を変えた。何もなかったことを伝えると、「ヒヤヒヤするなあ」といって安堵したという。水上は詩人Sと深い関係にあったということだ。

詩人と画家のカップルといえば、富岡多恵子と池田満寿夫が思いつくが、インシヤルが合わない。詩壇の重鎮でSをさがすと、吉原幸子、新川和江、白石かずこ、新藤涼子あたりだが、吉原は十年前になくなってるので、三人に絞られる。新川が水上と深い関係にあったとは考えられないので、白石か新藤だろうなあ、と思って、ネットで検索してみると、あっさりわかってしまった。ウィキペディアの新藤涼子の項に「一九五〇年代、新宿に文壇バー「とと」を経営し、客であった水上勉と同棲していた」とあった。

人の素地

ふとした瞬間に人の素地が見えてくる。話す声で人格がわかり、得意と自信さえ、あらわに出している。だまっけていても忙しく働らいていても人格がわかる。

東京五輪招致運動に水をさすこともないが言葉もない。次から次へと起きてくる被災地の問題、全く埋め切れぬまま現在に至っている。

気仙沼の友人から、蔵だけが残り、嫁入りに持参した着物を出して作りました。シオルダー、ブックカバー。私は、それを手にした時、へえッ、どうしよう。

この隔たりをどうする事も出来ずにいるのも私の素地なのか。

安倍首相も招致運動演説で原発不安を払拭するように「状況はコントロールされ、決して東京にダメージを与えない」と世界に胸を張って居られる。だが、炉心の実態さえ未だにわからず、汚染水がつづいているのをどう見て居られるのか。

ここでも被災地の不安や絶望を置き去りにされている。ひとりのバアさんが如何程ほえ立ててもどうにもならない。

ここで喜怒哀楽の刹那にリーダーの素地が現れるのではないのか。

ことばが足らぬ

自分の年齢を受け入れて楽しく生きたい、これが私のモットーだった。ところが或る日、気ままに一人旅を思いつき、観光案内所へ、

「バス共通回数券をください」「一枚づつ買って乗車して下さい。そんな切符は売っていません」

ボタンとフタを閉じる音。なに、アホ、くそ。自分の表情も鬼面化していたかも知れない。外気に当たってしばらく大きな息を吐く、まあいいか、でもやっぱり一枚づつ切符を買ってゆこう。

朝っぱらから一つの大きな石につまづけば一日げんくそが悪い。この足で歩いて20分はかかるか、でも、一駅でも乗ろうか。

「150円料金が不足です」、何回も返金されてくる。駅の改札には人も居らぬし便利になったものの、自分が間違っても腹が立つ。

駅員らしいお兄さんが、歩いてくる。のんきそうな顔、ひまをもてあましている顔

「ちよっと次の駅までゆきたいのだけれど、どうしたらいいの」「150円で切符を買ってください」

「それを何回もやってんのだけれど、もどってくるのや」

「押すのを間違えはったんやろ」

「そんなら、あんたやってみてよ」

「僕、そこへ用事があるので」

そそくさと逃げるようにしてゆく。

田舎のババアに相手になつていられるか、いわんかもの態度。

落ち着いて、誰にも気兼ねもいらん

がなア。切符販売機の前は、あんた一人。ゆつくり、よく見てお金を入れなアはれー。自分に言い聞かせて、

やと切符が顔を出してくれた。ヤレヤレ、私の気の短いのも反省、よくたずねて行動にうつす事。

やっぱり家が落ち着くなア。そうそう「そんな切符売ってません」と言うたあの言葉気に入らん。電話してこの件について話したら、女子社員が、

「そんなことありません。すみません。又後日改めて買いに来て下さい」姿は見えぬが謝っている姿、受話器を持ったまま、目に映るようで気分がおさまった。

思い出してみると、コトバが足らぬということ、何かに大きな支障を来すことに気が付いた。

「次の一駅ですから、普通電車に乗って降りてください」と、ちよっとつけ加えてくれたら、この老人その通りにしたのに。

電車が入ってくるなり準急に乗り、高槻からはるか遠方まで150円

のまま乗車。

少しボケがまわってきたのかも、反省。

俳句

土田 裕

真紅にも様々ありて冬薔薇

庭園の薔薇から薔薇てふ順路かな

木道に木漏れ日揺るる小春かな

枯山水水無き川に散る落葉

冬麗や冬の近づく峠道



編集後記

来月は師走です。早い一年でした。おかげさまで私の体調も順調に回復してきており大変うれしく思いながら「芥川だより」を書いております。ささやか事であっても、そこに楽しみを感じながらやっていると、いつの間にか生きがいになって、今では止めれなくなつてしまいました。

今回から、昔の友人たちが寄稿してくれました。若い時の友は、40年ぶりに出会っても、タイムスリップしてすぐに昔に帰ります。

これからも頑張りますからご愛顧の程よろしくおねがいします。(嘉)

## 入院の楽しみ1

## 梵店主

もうひとつの楽しみは、見舞い客である。家族や知り合いの方々の見舞いは本当にうれしい。毎日来てもらっても嬉しいものである。よっちゃんは、遠慮して来なくていいように言うが、実は来て欲しかったのだ

肉を食べるのが一番という家内の言葉と、腹が減ってたまらないよっちゃんの違いが一致して、ステーキ井やステーキ定食を食べた。よっちゃんのように毎日、レストランで食べている患者はいなかった。特異な患者だったのである。

家内も病室に来るたびに、差し入れの果物や飲み物などを冷蔵庫に一杯つめて帰った。そんな訳で、冷蔵庫が空になることはなく、糖尿病患者の目を盗んで食べてばかりいた。

多くの見舞い客から頂いた食べ物も、ひとり食べていたから、まさに異常な食欲が暴走していた。それだけ食べても、常に空腹感が襲ってきたので、よっちゃんは、病棟で昼と夕方支給される番茶を多くもらいこんでいた。このお茶は、たいへん美味かった。周りの人はあまり飲まず、いつも余っていたのでペットボトルに幾本ももらって飲んだ。

病院の楽しみは、食事だけである。食事の時間は決まった時間に遅れることなく配給された。食べる時間は5分もかからない。終れば次の食事を考える。情けないが、食べることだけが頭にあった。

「聖書は読まれました？」と聞いたことがある。先生は、時間がなくて読んだことない、と。研修医たちに聞いても読んだ人はいなかった。ひとり学校で習ったという看護師がいただけだった。聖書は小さな字で二段にページがなっていて読みにくいのだが、とにかく活字を追うように読むと理解が出来ない部分があつてもスーツと空気を吸うように入ってきたのである。「なあんーだ！そだったのか。」そんな一人合点を繰り返しながら、どんどん読んでいく。

入院して間もないころ、山の先輩が来てくれた。彼は、見舞い金と聖書を差し出した。「お前なら読めるやろ、おれが読もうと買っていたものだ」差し出された聖書は真つさらの本に見えた。「ありがとうございます。」と礼は言ったものの分厚い本を見て読む意欲は全く湧いてこなかった。

先輩が帰った後、ベッドで横たわりながら、せつかく持つてきてくれたのだから少し読んでみよう、と思いページをめくった。実は、病院のテレビを観るのに飽きて、家内に西部劇のDVDを30本ばかり買ってきてもらったが、それにも飽きてきた時だったのだ。聖書のまえがきを読み始めた。これは面白いかもしれない予感がした。旧約聖書の初めの部分を読み出した。私の予感的中して夢中になりだした。こんな面白い物語があるんだ、と気づいた。学生時代に幾度か読む機会があったのだが、バカにして本に触れもしなかったが、今読んでみると確かに面白い。

それから、私は毎日聖書を30ページぐらゐ乱読したのである。テレビも持参した本も見ず、タダひたすらベッドの上で聖書を読み続けた。教授回診の時、教授に

「聖書は読まれました？」と聞いたことがある。先生は、時間がなくて読んだことない、と。研修医たちに聞いても読んだ人はいなかった。ひとり学校で習ったという看護師がいただけだった。聖書は小さな字で二段にページがなっていて読みにくいのだが、とにかく活字を追うように読むと理解が出来ない部分があつてもスーツと空気を吸うように入ってきたのである。「なあんーだ！そだったのか。」そんな一人合点を繰り返しながら、どんどん読んでいく。

担当の看護師も「聖書って、そんなに面白いですか？」と聞くので「読み終わったらあげるわ」と答えた。ところが、後日談になるのだが、退院のめどがつかいだした頃から、同じように聖書を読んでいても以前のようにスーッと入ってこなくなつた。引っかけかりだしたのである。引っかけかりながらも、最後まで読み切った。すると不思議にも、何か肩の荷が消え軽くなったような気分になつていった。

「聖書は読まれました？」と聞いたことがある。先生は、時間がなくて読んだことない、と。研修医たちに聞いても読んだ人はいなかった。ひとり学校で習ったという看護師がいただけだった。聖書は小さな字で二段にページがなっていて読みにくいのだが、とにかく活字を追うように読むと理解が出来ない部分があつてもスーツと空気を吸うように入ってきたのである。「なあんーだ！そだったのか。」そんな一人合点を繰り返しながら、どんどん読んでいく。



旧約の一場面。杖で岩をうち、水をほとばしらせるモーゼの奇跡。(ローマ・カタコンベの壁画)

## 戦国時代に恋してる〜変態大研究

テレビの深夜ドラマ（「信長のシェフ」を見たのをきっかけに安倍龍太郎の「信長燃ゆ」を読んで突然、信長と戦国時代に恋してしまったアホ女、それが私だ、ということとは六月号に書いた。しつこくもその続編である。

六月号など読み返すと恥ずかしい限りだ。あまりにも「ひよっこ」であった。何もわかつちやいなかった。読んだ本の数も少な過ぎである。あれから数カ月、私は信長関連におけるオタク界の「若鶏」（もちろん本人は若くないです、比喩です）にまで成長(?)した。

まあ、これも後で読み返すと恥ずかしい思うに違いない。「若鶏」で自分では「ひよこが老けた」か「卵が腐りかけた」ぐらいやったで、と。それはともあれ。私の「信長関連文庫文庫」（文庫文庫は間違いではありません、文庫本が多いので）は今や紙袋二つにぎっしり、さらに増殖中だ。「信長」だけで山岡荘八でしょ、司馬遼太郎でしょ、大佛次郎でしょと大御所たちがわんさか書いているし、私のお気に入り安部龍太郎様、加藤廣様も現在の戦国定番作家は言うに及ばず。また、現代ものの人気が作家が書いているものも無茶苦茶面白い。

真保裕一という人が「霸王の番人」という明智光秀を主役にした小説を書いているが、思わず、信長様ではなく私が恋すべきは光秀様だったかと思つたぐらい、しびれた。「古畑任三郎」でおなじみの人気脚本家、三谷幸喜の「清須会議」は抱腹絶倒、笑つちやいました。柴田勝家なんか、「口の臭いおっさん」扱い。信長は最初に幽霊の形で登場するというか回想シーンだけなのだが、「俺、本当は死にたくなかつたんだけどさ」みたいなこと言ってるし。

津本陽ら正統「信長」本だけでも、まだまだ読んでいないものがいっぱいあるのだが、「信長」と書いてあつて安い文庫本になっていると基本、買って読んでしまう。本の厚さが手ごろだから。たとえば「織田信忠 父は信長」、「織田信雄 狂気の父を敬え」など。この二冊、別の人が書いているのだが、「ふうん、信長、エゲツナイな。親に持ちたくないタイプだな」という点で共通している。でも「恋」の力は偉大だ。「エゲツナイから面白い」とますます魅かれていく。変態である。

私の中で「信長」が本線とすると、支線にもフラフラ迷い込んでいる。明智光秀もそうだが、上杉謙信、武田信玄、利休、そして来年のNHK大河ドラマの主役・黒田官兵衛に、竹中半兵衛も。その結果、どうなっているかと

いうと、まず「目が痛くなった」。もとから下近眼。そこに老眼がかかっているから、相殺されて本は眼鏡なしで読める。何が幸いするかなんて、わからないものである。そこまでは幸いだったが、おかげで目がシバシバである。昼間も五分のすぎがあれば読み、夜はつつい読みふけて二時、三時はザラ。仕事以外使わなかつたパソコンを信長様がらみでも使うので、乾燥することおびたらしい。このまま、マイブームが続いたら失明の危機だ。

一概に信長様のせいにはできないが、「さらに太った」。元から体を動かすのは嫌いだ、出歩くのは好きだった。今でももちろん好きだが、「早く帰って、続きを読みたい」という欲求がある。カロリーは消費が減つた。家でなら、モノを食べながら読めてしまう(というか、至福のときだ)ので、カロリーの総摂取量が増えた。帰結するところは書くまでもないだろう。ぶよぶよ、デブデブ(泣)。

「友だちが減つた」もしくは「怒らせられた」。根っから「大阪のおぼはん」である私は言いたがり屋のおせっかいである。

「信長の家紋は織田木瓜紋って言うんやけど、なんかシブない?(にこにこ)」。でも、私は家紋やったら、明智の水色桔梗紋がベストと思うねん」はつきり

言つて、言われた方は「知るか!(怒)」であろう。山岡荘八の「織田信長」全五巻、「これは外されへんデ。いわゆるベールシツク?(半クエスチョン)」と無理やり親友に貸したら、一巻のはじめの方だけ読んで返された。「やつぱり無理」と。

別の友だちは、堺の生まれで茶道を何十年もやっている。だから「利休にたずねよ」を押しつけた。「堺が舞台やし、お茶の世界の話やで。茶器とかいっぱい出てるで。興味津々やろ」。余計なお世話である。その証拠にアイソよく「読んでもよ」と言われたが、いっかな進んでいない。読み終わるまで百年はかかるだろう。

私の「信長道」の原点にして原典、「信長燃ゆ」上下二冊。仕事仲間の若い子が「信長、私も大好きですよ、日本人が一番好きな歴史上の人物は、そら信長ですよ」と言うので気をよくして「最高やで。むつちや面白いで」と貸したら、さすがにこの子はしつかりすぐに読み終わつたが、「全然です、こんな風にバラバラに話を組み立てる意味がわからん」等々、滔々と「面白くない理由」を並べ立てた。ふんだ、こんなヤツに貸すんじやなかつた(泣)と、まあ友人、知人がどんだん減っていくのである。

ほかに「部屋がさらに散らかつた」「すみずみが汚くなつた」。説明の必要

はないであろう。頭の中が「信長様と戦国時代」であふれていて「今日は徹底的に掃除するぞ!」などと気合が入るだろうか。私は入らない。必要に駆られて冬用の布団を干したり、毛布のカバーを洗い直したりはするが、「カーテンを洗わなくつちや」という領域は「いずれ、そのうちに」。

この前なんか「家賃の振込がなされていない」と家主会社から通知が来た。その何日か前に払つたばかりだったから記憶も新しく、これは噂の振り込み詐欺か家主会社のミスだと思つて憤然と通帳を取り出してみたら、ナント! 十月分は払っているけど九月分を払ってなかつた。あやうく、振り込まない詐欺を働くところだった。

あれもこれも信長様のせいだと言つたら信長様が怒るだろう。謙信や官兵衛にも時間を割いたし。光秀に浮気もした。でもね、信長様、私はやつぱりアナタが好き。知れば知るほど人格形成に問題あり、むつちや悪者やん!と思いはするが、「そこもいい」。ついでに行こう、地獄の果てまで。やつぱり変態だな、こりや。

A O



織田信長画像  
(重文 長興寺)

## ツン読のすすめ

大江雉兎

春曙抄に伊勢をかさねてかさ足らぬ  
枕はやがてくずれけるかな

与謝野晶子の歌である。「春曙抄」

とは枕草子の注釈書で、「伊勢」は伊勢物語。春曙抄の上に伊勢物語を重ねると丁度いい高さと思ったのに、頭を乗せると低すぎてすぐに崩れてしまったといったところか。ともに和綴じ本だろうか、そこそこの厚みがある春曙抄と、薄っぺらい伊勢物語の組み合わせで即席の枕を狙ったようだが、微妙に当てが外れたらしい。家人が集めていた本を、幼いころより蔵に籠もって貪り読んでいたというエピソードが与謝野晶子にはある。そんなエピソードを彷彿させるとともに、思わずクスツとさせられる一首である。

晶子女史とは比べるべくもないが、僭越にもここでわが身を振り返ってみる。晶子女史のように蔵の本を片端から読み通すというのでなくても、あの本この本とつまみ食い端折り読みを重ねていると、気がつけば枕元にはたぐさんの本が積み上げられている。中には、手軽な枕に格好の高さになるものもあり、即席の枕は文字通り「ツン読」の効用といえるだろう。

つまらない雑談から始めてしまったが、書物を巡る近年の傾向を語る文脈ですぐに飛び出すのが「出版不況」や「活字離れ」という言葉である。確かに、出版物の売り上げは右肩下がりで急降下との話はよく聞く。小さな一軒書店の消滅が各地で相次いでいるのも事実である。売れ筋の本といっても、ごく稀にメガヒットになる小説が登場することはあっても、大勢はマンガやグラフィア本などで、活字文化の凋落は目を覆うばかりだとかの嘆き節。そうした話に接すると、時代の趨勢がこちらへ向いているんだから仕方ないと思う一方で、現代が「ツン読」的な読書スタイルを成り立たせない環境に向かっていることにも気づかされる。話が大きくなりすぎるが、効率主義によって凌駕される非効率の豊穰性という問題にも繋がってこよう。

「ツン読」の効用は、枕がすぐに作れる点は二番目であって、一番目に挙げねばならないのは、どういう形であれ、一度は興味の向いた本が手の届く範囲に置かれている点である。手の届く範囲に置かれているからこそ、もう一度、手に取って読んでみようという気にさせられる。おのずと読書意欲が刺激されるということである。もちろん、ツン読をモットーとしてしていると、部屋は当たり前のように散らかって

しまし、空間資源の有効利用という観点からもマイナスである。それでも、心を読書に向かわせる効果には、非常に大きいものがある。仮に枕元に堆く積み上げられている本どもを、意を決して本棚に戻したりすると、再びそれらを手取るのはいつのことになるだろう。もちろん、ツン読も度が過ぎるといけない。小物の紛失が相次いだり、部屋の中でつまづいたりなど、笑うに笑えないことも起きる。そうなるに付けざるを得ないのだが、それでも、つつい片付けの心が萎えてしまうのは、枕元に本があるということへの愛着なのかも知れない。

ところで、最近は印刷本に替わって電子出版が注目を集めているようだ。簡単なソフトウェアを操作することによってPDFやePubといった汎用性の高いフォーマットでの出力もできるので、出版という行為も一通りの知識と技術が必要だったひと昔と比べるとずっと手軽になつてきている。そして出版物（＝電子メディア）の頒布は、もちろんのことながら、紙メディアとは比較にならないくらいに軽便である。さらには整理や再利用も効率的に行うことができる、いいこと尽くしのようには言われるが、読書意欲をかき立てるか否かという出版物の生命に関わる部分については、あまり触れられない

ことがない。それは言うまでもなく、実体を伴わないがゆえに、紙メディアとは比較にならないくらいに劣っているからである。空気のようには存在感がないわけだから、存在への愛着もほとんど生まれてこないのである。

社会の要求がひたすらに効率を追い求めるところへ向かうのはやむを得ない。そして人々の生活スタイルがそれに適合したものに変わるのも防ぎようのない。しかし、効率至上主義が踏みつぶしてゆく古い習慣の中には、失ってから気づかされる豊かさを併せ持っているものも多い。電子出版という新しい時代の新しい出版スタイルが広まれば、これまで想像もできなかった新しい何かが生まれてくるかも知れない。可能性を論じるのであれば、電子出版には多くの可能性が詰まっている。だが、その一方で、訳も無く無性に本が読みたくなる衝動、いわゆる活字中毒者を撲滅する危険性もあるように思えてならない。



## 老人の戯言

駒田明克

小生、以前『老人の戯言』と称して9回にわたって日頃感じた事を、拙い文章で綴らせていただきました。

最初はストレス発散のつもりで気軽に書いていたものが、9回も続けてしまうと、何かしら無力感を感じ、かえってストレスが溜まってしまおうという相矛盾した結果になってしまい9回で打ち切らせてもらいました。

その後は、かわら版のテーマを趣味の中心に毎月テーマを変えて書かせていただきました。

ここにきて、どうしてもストレスを感じるが多くなってきましたので、今月だけ『老人の戯言』を書かせていただきます。

### 若者のヘアスタイル

小生、年と共に薄くなった髪の毛のコンプレックスから言っているのではありません。昨今、街で見かける若者、テレビの芸能人、スポーツ選手とくにサッカー選手に多く見られる長く伸ばしたバサバサ(ボサボサ)のヘアー、その中の何人かは似合わない貧疎なヒゲ面、おまけに茶髪に染めている。

これらは現代の若者のファッション

となっておりませう。

昔も、ヒッピーといわれる連中が同じように居りましたが、彼等との違いはヒッピーは自己主張の手段の一つであったのに対し、現代の若者はこのヘアースタイルをファッションとして捉えているのです。

しかし、彼らの中で格好よく見えるのはごく少数で、ほとんどは公園の青テントの連中と同じで不潔感が漂い、そこへもって茶髪とくれば日本人の肌の色と茶髪が美的に合うわけもないのに、無神経に茶髪に染めている美意識の欠如したバカとしか言いようがありません。

### スポーツ観戦の応援スタイル

プロ野球の中継をテレビ観戦していると、最初から最後まで私設応援団のリードのもと、下手なトランペットとともに合唱隊よろしく、歌を歌っている。それも試合の展開と関係なく行われて居り、小生はテレビのボリュームを落として観ている。

また、サッカーの試合でも全てのチームとは言わないが、一部のチームの応援団は試合中ずっとマサイの戦士よろしく全員が飛び跳ねている。彼らはこれでモチベーションとやらを高めているつもりらしいが、バカまるだし。

野球、サッカーによらずどんな観戦

でも緊迫したシーンでは思わず息を飲む一瞬の静寂、その後場内を揺るがす歓声、これぞ、観戦の醍醐味。サッカー中継で気になるアナウンサーのコメント。

小生、サッカー大好き人間ですが、テレビ中継で各局のアナウンサーがよく申し合わせたように発する言葉に「決定的でしたね」というのがありますがこれが気に入りません。

ゴール前で、ディフェンダーを振り切り、キーパーもかわし懸命にシュートを打ったシーン、ボールは無情にもゴールの枠外へ。この時のアナウンサーのコメント「決定的でしたね」。いつも、小生、テレビのアナウンサーに向かって言います。「ゴールが決まっただけから言え」と。

### メディアのあさましい姿

ほめておいて、あとから落とす。いつの時代もこのメディアの姿は変わらないものと見受けられます。

あれほど、持ち上げて民主党政権の誕生、3年経てばガラクタ政権、その姿を見抜けなかった自分らの無能さを反省しない日本のメディア。

政権も変わって自民党安部政権になつて今のところ、各種のアンケート調査でも高支持率を維持していますが、新聞の各週刊誌の広告見出しだけを見

ていると、そろそろ政権叩きが始まった感があります。

西部邁氏の日本のマスコミを評して「マスコミというよりマスゴミだ。」の言葉が当たっているように思います。

### 本を読まなくなった若者

先日、テレビを観ていると、街で若者へのインタビューがあり、あなたは1週間に何冊の本を読みますかとの質問に、ほとんどの若者の答えは全然読まないでした。なかにはマンガは読むという者もいました。が、彼らは漫画を本と思っているらしい。なぜ、昨今の若者は本を読まなくなったのか、それには、パソコンやアイポット等の影響が大きいと思われる。

若者たちは新聞も取らないそうです。朝起きて、新聞を読むとき、微かに匂う紙かインクの匂い。これも最近の新聞、印刷技術の進歩によるものか、気のせいなのか、匂わなくなりしましたが、歳のせいですか。

彼らはパソコンやアイポットで必要な記事のみ読めばいいと考えているようです。しかし、新聞は紙面をめくることによって目に入る様々な記事、これらによって、否がおうにも知らず知らずのうちに色々なことを知ることが出来るのです。

必要なことだけ読めばよいというのは、アメリカ式に言えば合理的かも知れませんが、ますます幅の狭い人間が出来ませぬ。心配です。

## いよいよ輸出部への勤務

明石 幸次郎

Mさんは韓国の担当を外されたことに  
対し、無念さと強い憤りを韓国側と自分  
の上司に感じていた。明石はMさんの無  
念さに同情しながらも、それをA課長に  
ぶつけないのか、なぜ自分が外されたの  
か、自分のやり方のどこに問題があつた  
のか、なかったのか、外された原因は何  
かを問うべきだと思つたが、転勤初日の  
何も事情の分からない明石に憤りをぶつ  
けて来た。

「韓国の仕事の引継ぎは書類にまとめ  
るので、今日の午後からやろう。明石も  
鄭専務には気をつけないと、彼は日本語  
が喋れるので、問題があれば、担当者  
が無視して頭ごなしに苦情とか、要求を直  
接トップに国際電話で言つてきて、ここ  
らでやろうとしていることを変えさせて  
しまう。ほんまに、やつかいな人や。ウ  
チのトップも問題や、相手の要求を直ぐ  
に呑んでしまい、鄭さんの言いなりにな  
っている」と、鄭さんのやり方に対する  
不満とそれに同調するこちらのS輸出本  
部長への不信感を口に出した。明石は詳  
しいいきさつ、又、鄭さんがどんな人か、  
そのやり方の正当性があるのかが分から  
ないので、Mさんの言い分を聞くだけに

終始した。

Mさんは「大体、韓国人は自己主張が強  
く、価格交渉でも何であれ、交渉ごとは一  
方的に自分たちの言い分を主張するだけ  
で、こちらの言うことに聞く耳を持たな  
い。それで時間がかかり、中々話がまとま  
らへんわ。難儀なことに、心情的には自分  
たちの国を植民地にした日本人への恨み  
と不信感が今でも韓国人は根に持ち続け  
ている。何か起こると日本人に騙されてい  
るのではないかとと言う警戒心と不信感を  
常に働かせているので、何をしてもやり  
にくい相手や。誰も敬遠して韓国だけは担当  
になりたくないのや。俺も3年程やらされ  
たが本当に苦勞した。担当を外されて、明  
石には悪いが清々してるわ。アンタも苦勞  
すると思うがこれもめぐり合わせや、頑張  
れよ」と、お前も厄介な国を担当させられ  
大変やなあという同情心の混じつた激励  
を受けた。明石はMさんの言うことに耳を  
傾けながらも、ビジネスなのだから、どこ  
の国の人とやっても相手は自己主張し自  
分にとつて有利な条件を得ようとするの  
は当然で、何も韓国人だからと言って日本  
人にきつく当たつて一方的な主張ばかり  
するとは思えなかつた。

との関係は違つと、明石はMさんの  
言い分に違和感を抱いた。ただ、韓  
国に行つたこともないし、実際に韓  
国人と仕事をしたことがないのでM  
さんの意見に対し何とも言えなかつ  
た。

ただ日本との歴史的な関わりの中で韓  
国人が日本人に対する思いはMさんが言  
うように複雑な思いを抱いて、敏感になつ  
ているのかも知れないが、国家間の関係と  
お互いの利益を追求する民間のビジネス

しかし相手の国と人、Mさんのや  
り方のどこに問題があつたのか、な  
かつたのかは、事前によく知る必要  
はあると思つた。近々に韓国に出張  
に行くことになりそうでその前に、  
韓国の歴史、国民性と多少の韓国語  
と韓国の歌謡曲を勉強しておこうと  
考えた。又、Mさんが韓国の相手先  
に強い不信感を抱いているが、多分  
相手もそれ以上にMさんに強い不信  
感を抱いていそうである。その原因  
は何かを調べておくことは絶対必要  
だと思ひ、Mさんのやり方と全く違  
う、相手の懐に飛び込み、お互いの  
信頼関係をどう築いていくかが韓国  
とビジネスを続けていくからには是  
非やらねばならない課題であると感  
じた。

Mさんは、その後、A課長や、T  
畑さん等の輸出本部にいるA産業か  
ら入つて来た商社出身の人間に対す  
る見方を明石に言つた。特に上司で  
あるA課長に対してはK部長ばかり  
見ていて、部下に対するコミュニケ  
ーションと配慮が全然足りないこと  
を害さない程度の質問をじわじわとぶつ  
けてみた。



第一話 水が水に浮く、いとをかし

坂本一光

『春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は、夜。月のころは、さらなり。闇もなほ。蛍の多く飛び違ひたる、また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るも、をかし。秋は、夕暮れ。・・・冬は、つとめて。・・・』

清少納言『枕草子』冒頭の一節である。「をかし」は、おもしろい、興味がある、趣があるなどの意味で肯定的に使われる言葉。『枕草子』には、自身が関わり観察した宮廷の日常生活や自然のあれこれが綴られている。肯定的で明るく、理知的な精神がある。彼女にもし水に関するほんの少しの科学的な知識があったとすれば、「氷が水に浮く、いとをかし」と書いたはずだ。(断わっておく必要があるが、私が読んだのは上記の一節くらいにすぎない。氷が水に浮く不思議の記述がもしやあったとすれば、清少納言さん、ごめんなさい。その時は、『枕草子』も言う、氷が水に浮く、いとをかし」と訂正します)

さて、水は、空気とともに、最も身近なありふれた物質である。生命維持に

不可欠であることは言うまでもない。しかし、普段は、雨が降れば恵みの雨と思うより、いやだなと思う。井戸や川などから水を汲んで運ぶこともなく、水道の蛇口を回せば水は出る。理的な目を水に向けることは、日常、まずない。水は、ありふれた、あたりまえの存在である。

しかし、水は、それと類似した物質や、それと同じように小さい粒子から成る他の物質と比較して、決してあたりまえでない、ただものではない性質(水の特異性という)をもっている。

その一つは、水(固体の水)が水(液体の水)に浮くこと。どんな物質でも、その固体はその液体に沈む。沈むべきである。なぜなら、固体は液体よりも構成粒子が密に詰まっているはずだから。しかし、その光景を目にする機会にはほとんどない。0℃から100℃の日常的な温度範囲で固体、液体、気体という物質の三態を見ることができ(水蒸気は無色透明、目に見えない)物質は水以外にない。

この温度範囲では、多くの物質は、固体、液体、気体のいずれか一つの状態だけで存在する。固体が液体に沈む光景を見ることはない。まれに、固体と液体(例えば、金属ナトリウムは98℃で融け、880℃で沸騰する)、または液体と気体(アルコール、発酵品

なら飲んでよいエタノールはマイナス114℃で凍り、78℃で沸騰する)で存在するものがある。金属ナトリウムは実験室にしかないし、マイナス114℃は非日常的だから、これらの物質の固体が液体に沈むのを日常目にすることはない。

なお、固体が液体に浮く物質が水以外にはないかと言うと、実はある。たとえばケイ素。砂粒に含まれる成分であるケイ素は1410℃で融け、見たことのないが、融けている間その固体は生じた液体に浮いているはずである。ケイ素以外にも2、3の日常目にするのではない特殊な物質が知られている。それらは、結晶の構造が氷と同じである。氷の密度は、水の密度(1立方センチメートルあたり約1グラム)に比べておよそ1割も小さい。固体が液体よりも密に詰まっているとはどういうことか、そのことについては次回以降に触れる。水は、ありふれた存在物でありながら、固体が液体に浮くなどという固体にあるまじき振る舞いをする。この一点だけからみても、水はただものではない。

以上取り上げた温度は、いずれも通常の空気(大気)の圧力が1気圧のもとでの話である。通常、1気圧の下で固体が融けて液体になる温度を融点、液体が沸騰して気体になる温度を沸点という。物質というのは変なもので、温度と圧力を

決めると、そのもとでその物質が固体か液体か気体であるかが物質ごとに固有の性質として一義的に決まっている。同じ物質でも、圧力を変えれば、融点も沸点も違ってくる。地上より圧力の低い山の上では、水は100℃より低い温度で沸騰し、したがって普通に米を炊いたら硬くて食えないことになる。

ちなみに、標準大気圧である1気圧(1013ヘクトパスカル)とは、1平方センチメートルあたりに1キログラムの重さがかかっている圧力である。10メートルの水柱を考えると、断面積1平方センチメートル当たりの重さは1キログラムである。水に10メートル潜れば、大気と水による圧力を合わせて2気圧が身体にかかることになる、という理屈。

ついでに言えば、大気圧が1気圧とはどういうことか。地球が持つ空気の大半分は地表からの高度10数キロメートルの対流圏に存在する。固体や液体が気体になるとその体積はおおざっぱに言って1000倍以上になる(ドライアイスに密閉容器に入れてはいけない、気体になれば容器が破裂するほど圧力は高まる)。気体の密度はおおざっぱに言って水の1000分の1、10メートルの1000倍は10キロメートル。1気圧の大気圧は、10キロメートルの大気柱の重さによる圧力である。

閑話休題、以上のようなわけで、氷が水に浮く、いとおかしく、いと不思議で、いとまれなる現象を、われわれは、ただありふれた、あたりまえの光景として目にし続ける。それはいたしかたないことではあるが、氷が水に浮く現象は水の特異性の最たるものの一つである。

水の特異性をもう一つ。水は、あらゆる物質を溶かすことができる万能の溶媒である。溶媒とは、その中に何かの物質を溶かす液体のこと。量を問題にしなければ、コップに入れた水はその瞬間からガラスを溶かし始めている。水は、多くのさまざまな物質をよく溶かし、その流動性によってさまざまな場所に物質を運び、物質と物質の出合いによる化学反応の場を与え、反応とはある物質が別の物質に変化することであり物質はそれに固有の化学エネルギーを内包しているから反応にはエネルギーの出入りが伴い、結果として反応によってエネルギーまでもが運ばれたことになる。生命を支える物質代謝、すなわちエネルギー代謝に水は決定的に重要な役割を果たしている。この水に何の毒性もないとは、驚きと感謝の言葉を知らない。

つながりやをゆるめるには多くの熱エネルギーが必要である)、冷めにくい(高温から冷めていくときには一度ゆるんだつながりやがだんだんと元のようにならないうちに強まってしまう)、そのとき、つながりやをゆるめるのに必要であった熱が放出される)物質の代表である。できるだけ表面積を小さくしようとする性質、表面張力も水銀やナトリウムなどの液体金属に次いで非常に大きい。丸い水滴になるはずだ。この性質は、土壌が水分をよく保持すること、数十メートルの高さの木の梢までも水が吸い上げられることなどの理由の一つである。水は互いにつながって、まるで意志ある一つの生き物のようにさえ振る舞う。映像でみた恐るべき津波の姿は象徴的である。水の基本粒子は、直径1億分の3センチメートルほどのほぼ球状に近いものである。ちっぽけな存在であることは人に似ている。しかし、人と違って個性はなく、一つ一つの粒子を性質の違いで区別することはできない。しかしまた、人と違って、先に述べたように、どんなときにもどこでも互いによくつながっている。これは何かをしばらくつける絆によるつながりではない。言ってみれば、個性によらない、対等で平等な粒子間の等価的なつながりである。人が自然から学ぶものの一つであろう。

ある。「その予感世界に満ち、奇跡はどこに起きる——それを知らぬ者を痴れ者という」、かつて阪神タイガースが18年ぶりに優勝したとき年賀状にそう記したが、世界(人と社会、自然のこと)にはこれと違ってありふれた奇跡の方が多いのである。ただし、それは、知らなければ、考えなければ、感じ思わなければ何の不思議でもない種類の奇跡である。

水の基本粒子は、よく知られているように  $H_2O$  と表記される水の分子である。Hは水素原子、Oは酸素原子を示す。1個の水分子は2個の水素原子と1個の酸素原子から構成されている。普段見ている水は、この水分子が無数に集合したものである。水の溶解能力や固体が液体に浮く特異性には、他の物質の基本粒子にはみられない水分子自体に固有の性質と、それに基づく水分子—水分子間に固有の結合の仕方が反映している。追々とそれを見ていくことにしよう。かたい話が続いたので半分冗談話をしよう。これも水に関する話である。○オン・ザ・ロックか、アンダー・ザ・ロックか。—「何にしますか」「バーボーン、ワイルド・ターキーを」「ストレートですか、それとも」「オン・ザ・ロックで——そう言ったのに出てくるのは必ずアンダー・ザ・ロックである。あれ、なんでや、と思ったことはありませんか。ロック氷の上に注ぐからだろうが、どうしてできあがったものの状態で名前を付けないのか。いつか一度、「アンダー・ザ・ロックで」と注文してやろうと思っていたが、殴られたら嫌でさう言う勇氣もないままに、退職するとう酒場で酒を飲むなどということもなく、一遍これ言ってみてください。そして、反応を教えてください。

○次に、トップダウンか、ボトムアップか。オン・ザ・ロックはどうやって作るか。コップに氷を入れて、上からつまりトップダウンで酒を注ぐ。あらゆる不思議、コップに酒はボトムアップで満たされる。どんな組織でもその運営をめぐってトップのリーダーシップによるトップダウンが大事、いやいや構成員によるボトムアップこそ組織の力を高めるなどと不毛な議論を好んでする。何を言うか、酒をついでみい、トップダウンとボトムアップは一つの現象の二面にすぎない。これも現役のときに言う勇氣はなかったことである。○最後に、水に流す話。日本人はあつたことでもなかったことにするのが好きなようだ。酔っばらつてなくても、「氣持ちはわかるけど、まあ今回だけは水に流して」などという奴がいる。流してよいものなら流せばよい。しかしこ

新連載

アルツハイマーの母とともに歩む(1)

成瀬和之

れだけは、どうしても腹にすえかねるときはこう言おう。水は優れた溶媒ですから水に溶かして流すのですか、または、それはさすがの水にも溶けませんが、せんから浮かせたまま流しますか、あるいは、いっそ水に沈めて流すのですか、等々。そして、『浮いたか瓢箪かるそに流るる 行き先や知らねど あの身になりたや』とおわら風の盆・おわら節の最後のはやしことばをはやしなから、一目散にその場を流れ去ろう。

最後に、第一話には宿題がある。考えてみよう。

宿題1…もし氷が水に沈んだら、ということは、水が、もしその固体がその液体に沈むようなあたりまえの普通の物質であったとしたら、地球の風景は今の風景とどう違ったものになってしまうのだろうか。

宿題2…われわれの生命維持に必要な物質のなかで生物に由来しないものがあるか。あるとすれば何か。

(自然はまちがわれない、まちがうのは人間である・大分の素老人)

追記:『ありふれた奇跡』は、山田太一脚本の同名のドラマからとった。フジテレビ開局50周年記念ドラマとして、2009年1月から3月に放送された。仲間由紀恵・加瀬亮主演で、あたりまえであることが本当は奇跡なのだ、と考えさせるドラマだった。

父の法事の日、私はお供えのまんじゅうを買ってきて、テーブルの上に置いておいた。法事の準備をして、まんじゅうを供えようとすると、そのまんじゅうがないのである。家中探しまわった末、押入れを開けると、食べ散らかされたまんじゅうがでてきた。誰だこんなことをしたの？ 犯人は、なんと我が母であった。動揺した私は、役所を尋ね介護のセンターに行き、病院を紹介してもらった。病院で診察してもらったところ、CTスキャンと簡単な心理テストで「脳の萎縮が起こっています。アルツハイマー病です」とあっけなく診断された。それから15年、私は母とともに歩んできた。

いくつかエピソードを紹介しよう。母を風呂に入れてさっぱりし、パジャマを着せ、おむつを着けようとした矢先、母は大便をしてしまった。「母」が崩れゆくのをくい止めるように、もくもくと身体をきれいにし、おむつをあてがう時の情けなさは忘れられない。母が、私のことが誰かわからなくなる日がついにやってきた。しかも、主たる介護者である私の名前がわからないのに、遠くに住んでいて、めったに来ない弟の名前は覚えているのであ

る。情けないやら、悔しいやら、そのころ韓流映画「私の頭の中の消しゴム」を観た。若年性アルツハイマーの妻を介護する夫の話である。妻が夫に話しかけるのに、「昔の男」の名前で呼びかける場面がある。夫は笑顔で応答した後、家を出て玄関先で号泣する。私はこの場面を見たとき、涙が溢れて止まらなくなってしまうのを思い出す。母が徘徊してバイクに跳ねられ、ひき逃げされた。でも母は何も語ることはできない。ついに、病院に入院することになった。それから母に面会に行くことになる。

何とか乗り越え、母とともに生きている。仏教では、人間は「四苦」(生老病死)を免れることは出来ないという。母との対話は、その生老病死をめぐる哲学問答のように思えてくる。近代哲学の祖、デカルトは、「我思う(疑う)故に我有り」といった。そんなの「嘘っぱち」だと私は思う。母は、思わないし、疑わない。でも、生きています。私が誰かわからなくても、甘い物がほしいと言いつつ、「りんごの歌」など昔の歌を歌えるではないか。ときどき真面目に尋ねてみる。「良い男の条件は？」(私) 「男前に決まっているやろ」(母) 「人生で一番大切な物は？」(私) 「お金や」(母) 私は笑ってしまう。そうかと思うと、私は「長生きの秘訣は？」と問うと、あるときは「快食快眠快便」と答えたり、「元気でニコニコ」とか、なるほどと納得させられることもある。

母は病棟で、「伝説の患者」になりつつある。もう母が入院したときを知っている病棟のスタッフは誰もいないのだから。その伝説は、まだ未完であり、現在進行形である。

そのうち、私が呆けたらどうしよう。テレビで耳寄りの話を聞いた。「一日六千歩以上歩くと、前頭葉の萎縮を防ぐことが出来る」(国立長寿医療研究センター、下方浩史氏)。成人病の予防も兼ねて、せつせと毎日歩くとしよう。

伊藤 明

◆はじめまして。私は街の病院で精神科の外来診療をしている医者です。これから表題通り、診療をしながらあるいは診療の外で心に浮かぶ「よしなしごと」を書いていきたいと思っています。

◆団塊の世代に近い年齢の精神科の医者として、その経歴の終わりに近づき、何か私の経験をまとめておきたいという気持ちになってきました。書き留めておかないと忘却の底に埋もれてしまうかもしれない……、その中にはこれを読まれた方に何かの参考にしていただけるものがあるかもしれない……と思うのです。そういうものがひとつでもあればいいが、と念じながら書き綴っていくことにします。

◆また精神科の医者というものには対しては、なじみのない方が多いのではないかと思います（馴染みにならないのが一番かもしれません）。以前に比べ、最近はいくぶん改善されていますが、必要以上に怖がられ敬遠されることが多く、治療の開始が遅れてしまうことがあるのが残念です。そういうことを防ぐという願いもこめています。

◆私は二〇年ばかり前に『中年期のこころ模様』という本を出版しました。それ

なりに好評価を受けたと思っていますが、残念ながら品切れ状態になっていて、本の形で皆さんに読んでいただくことができません。そこで初めは、この本の大事なところを著者である私がご紹介していきたいと思えます。なおこの本は現在無料でネットから読むことができますようにしてありますので、興味を持たれた方は直接読んでいただくといいです。（この題名で検索していただくか、『デイープな京都と認知療法』という名のホームページに出していますので、これで検索していただければ出てきます。）

◆この本の内容は、第一に「人は一生発達・成長をする」ということ、第二に人は「身体とこころと社会」の三つの視点から考えていく必要があること。そして第三に「うつ」という病気についての解説と、当時広まりかけていた心理療法の一つ「認知療法」についての私なりの紹介について書いたものでした。

◆今回は「人は一生発達・成長する」ということについて解説をしてみました。「発達・成長」というと、みなさんはどんなイメージを持たれるでしょうか。おそらく右肩上がりのグラフが浮ぶのではないのでしょうか。

◆実際に医学・医療の分野で「発達・成長」というと小児科で使われることが多く、子どもの発達はまさに右肩上がり

あてはまります。首がすわり、ハイハイし、歩き始めるといった子供の発達は、能力の獲得・領域の拡大ということになります。だが成人になってくると、そういうわけにはいきません。体力的・身体的には二十歳代がほぼ頂点で、あとはゆっくり下り坂になるのが普通です。多くの人は四十代や五十代の一定の時期になると、夜更しや徹夜がこたえる、疲れの回復が遅くなる、老眼がはじまった、というように、段階的に体力の低下を自覚するものです。このような体力の低下は、部分的には適切に鍛えることで有る程度は改善できますが、大勢としては人間という生物種の現実として致し方ないところなのです。

◆しかし一方、体力とは違って精神的・心理的な「発達・成長」というものは、一生継続くものだということを私は強調したいのです。といつても注意をする必要があるのは、精神的・心理的な「発達・成長」は、必ずしも右肩上がりのものばかりとはいえないことです。

◆若いころの「発達・成長」が、自分のもつ能力や領域の拡張・拡大といえるけれど、人生後半の「発達・成長」はそうはいかない。その境目なのが四〇歳ころです。この時期は「中年の危機」などと呼ばれたり、また男性では昔から「厄年」といった言葉で表現されたりしている

◆このころにはいろいろな問題が同時進行で起こってきて、身体的・心理的なストレスが非常に強くなりやすい。自分のことは二の次にして、会社のため、家族のために、を第一に活動しなければならぬ状況があります。この時期さまざまな形で矛盾が吹き出すことになりやすい。無理がたたって身体の病気（さまざまな生活習慣病、くも膜下出血や心筋梗塞など怖いものなど）として出る人、ある日突然出勤できないといった形で、「うつ」などの精神的な疾患として出る場合も多いのです。

◆このような場合、自分をどう考えているのかという「自己イメージ」が問題になります。中年期の危機に「うつ」にかかった方々と話しているときに私が感じるのは、「自分は何とでもできるはずだ」といった右肩あがりの発想が強いこと

です。どんどん発展してゆきたいという希望は、前向きで非常によいものと一般には考えられやすいし、それも必要なことなのですが、それが上で述べた体力の衰えという現実を無視した形をとると、大きな問題となるのです。

◆さらに、「人の上に立たなければならぬ義がない」といったように感じる人が世の中に多い。高い得点をめざし、他人との競争に打ち勝っていくことに価値をおき、それを求めて努力をする。そ

れが達成されれば、親や先生から褒められるという体験のくり返しが、自分の中に深く根をおろし、無意識のうちにもこのような自己像を形作っているのです。「努力をすれば報われ、人に勝つことができる」という価値観をもって実践しようとする人は、若い頃には高い得点を獲得して何らかの形で社会的な成功をおさめることになり、そのことがこの価値観をいつそう強く学習し身に染みこませるといふことになるものです。実際学校教育の中でも家庭の中でも、しつけや教育の名のもとにこのような価値観を植え付けがなされているわけです。

◆ところが、中年以降の年代になってくると、人をとりまく状況はそんなに単純なことではなくなってくる。若いころに誉められた親や先生はもういない。若いときのようにならなくても必ずしもいい結果が出るわけではなくなくなる。またそのような努力をする体力もなくなってくる。焦ってもがいても空回りをしてしまう。その結果、「うっ」の状態に陥る人が出てくるのです。右肩上がりの「発達」を求めて、それが達成できないときには、自分の存在に意味を見いだせないといった発想。これはそれまで受けてきた「教育」や成功体験からの学習に根ざしているといえそうです。

◆このようなとき、一度立ち止まり、自分を駆り立てていた価値観、「努力すれば報われる、また人に勝つことができる」といった価値観を省みる必要が出てきます。「量的拡大ではなく、質的な深み」にこそ、人生後半の発達の特質があるといえるのです。では人生後半の「発達・成長」の内容は、どんなものでしょうか。それは次回に。

◆こんなテーマを取り上げてほしいといった、ご希望がありましたら、編集部へメールでご連絡ください。個々の相談はできませんが、参考にさせていただきます。ご返信はございません。



### 編集部からのお願い

ご希望等を手紙やメールでお送り下さい。なお、手紙等は返却いたしませんのでご諒承ください。こちらで焼却いたします。

### 宛先

〒569-1123

高槻市芥川町3の14の3

梵くぼんく 下村嘉明宛

e-mail: akutagawa\_dayori@yahoo.

co.jp

★していた。このときMも窪島も既婚者で、お互い納得ずくの交際だった。あるときMが窪島に告白する。『父水上勉』『女優泥棒』から引用しよう。『私、お父さまと寝ちゃった』

ふいに、助手席にすわった女優のMがつぶやく。

「え？」

わたしが声をのむと、

「このあいだね、近くにお仕事があったんで、若狭の一滴文庫に行ってきたの。いいところねえ、あんなところであんな仕事ができたら、男として最高だと思うわ」

Mはいった。

「寝ちゃった……って」

「そうよ、先生が疲れているなら泊まってゆきなさい、っていつてね。同じオフ通で寝ちゃったの。誠一郎さんにはちょっと悪いな、って思ったんだけど」

わたしは、フロントガラスのむこうの景色が急に遠のくのをかんじた。

二人の交際は、「あるテレビの美術番組」で顔を合わせたのがきっかけだというが、おそらくMが司会をしていたNHKの「日曜美術館」であろう。

二人で食事をしたり、温泉に行ったり、成り行きで一緒に寝たりということもあつただろう。

そんな逢瀬を重ねながら、相手の父

親と寝ちゃうMとはどういう女のらうか。「外国生活も長く経験していて、そっちの方面ではかなり奔放なところのあるMだったから、たとえ行きづりであつても相手と意気投合すれば、そんなふうになるのは当然だったかもしれない」と窪島がいうとおりの女なのだろう。それにしても、なぜそれを窪島に告白したのだろうか。けっきよく窪島はこれを機にMと別れるのだが、

窪島は「どうも最初から彼女のお目当ては父の水上勉だったらしいのである」と想像する。

窪島は「今から考えてみれば、そんな有名女優さんがわたしのようが男に感心をしめるわけはなく、どうも最初から彼女のお目当ては父の水上勉だったらしいのである」と想像する。

水上も息子の窪島とMが交際していたことは知っていた。知った上でMと寝たのである。

「それを知らないながら……キミと」

「しょうがないじゃない。男と女なんて、そんなもんよ。べつに私、これ以上若狭に行こうとは思っていないから」

「そんなもんよ」という男女関係をくわしく、経験談を交えながら教えてほしい。浜美枝さん、できればひとつふとんの上で。(猿)